

卒後2年目看護師の行うリフレクションがキャリア開発に与える意味と継続教育方法の検討

著者	東 サトエ, 児玉 みゆき
雑誌名	南九州看護研究誌
巻	15
号	1
ページ	10-20
発行年	2017-03
URL	http://hdl.handle.net/10458/5953

卒後2年目看護師の行うリフレクションが キャリア開発に与える意味と継続教育方法の検討

The Meaning and Effects of Reflection on Career Development in Second Year Nurses and Consideration of Continuous Education Methods

児玉みゆき¹⁾・東 サトエ²⁾

Miyuki Kodama · Satoe Higashi

Abstract

This study aimed to examine the meaning and effects of reflection on career development among the second year nurses. The reflections were performed using writings of three reflective journals and feedback interviews of eight subjects. Ten categories were extracted and they were categorized into two after analyzing the contents of the semi-structured interview data.

The “ability necessary for nursing practice” core was ‘the surge of self-understanding and self-empowerment’, and ‘acquisition critical thinking’, and ‘acquisition of nursing practice abilities that utilize abilities of others’, and ‘improvement of communication skills according to the situation’, ‘the surge of recognition of nursing actions that both meet safety and ethics’, and ‘deep understandings of team work in medical management’ which led through to ‘the surge of a mature nursing practice development’. The “ability to conduct reflection” was composed of ‘improvement of skills necessary for reflection’ ‘deep positive recognition of the value of reflection’, and ‘acquisition of the ability to reflect continuously’.

The whole structure of the “ability necessary for nursing practice” and “ability to conduct reflection” developed the process of thinking with ‘the surge of self-understanding and self-empowerment’ at the core and “ability to conduct reflection” surrounding “ability necessary for nursing practice” in a spiral.

Reflection stimulated career development of the second year nurses, and its usefulness as a continuous education method was suggested.

要 旨

本研究は、卒後2年目看護師のキャリア開発に、リフレクションが与える意味と効果を検討することを目的に、8名を対象に、3回のリフレクティブジャーナルの記述とフィードバック面接によるリフレクションを実施し、半構造化インタビューデータを内容分析した結果、10のカテゴリーが抽出され、2つに分類された。

【看護実践に必要な能力】は、【自己理解と自己をエンパワメントする力の高まり】を中核に、

1) 潤和会記念病院

Junwakai Kinen Hospital

2) 宮崎大学医学部看護学科基礎看護学講座

School of Nursing, Faculty of Medicine, University of Miyazaki

【クリティカルな思考の獲得】をし、【他者の力を活用した看護実践能力の獲得】と【状況に応じたコミュニケーション力の向上】により、【安全性と倫理観を融合した看護行動の認識の高まり】と【チーム医療マネジメントの理解の深まり】を経て、【熟慮した看護実践の展開力の高まり】に至っていた。『リフレクションを行うための能力』は、【リフレクションに必要なスキルの向上】【リフレクションの肯定的な価値認識の深まり】【継続的にリフレクションする力の獲得】で構成された。

両者は、【自己理解と自己をエンパワメントする力の高まり】を中核に、『リフレクションを行うための能力』が『看護実践に必要な能力』を螺旋状に取り巻き、思考過程を発展させる全体構造を示した。リフレクションは2年目看護師のキャリア開発を促し、継続教育方法としての有用性が示唆された。

キーワード：リフレクション，2年目看護師，思考過程，キャリア開発

：reflection, second year nurse, thinking process, career development

I. 緒言

医療の高度化・専門化に伴い、患者・家族のニーズは多様化し、患者中心の安全で質の高い医療・看護の提供が求められている。厚生労働省(2009)は、入職後1年目の看護師を対象に、新人看護職員の研修制度と称して、研修の努力義務化を導入・推進してきた。しかし、Benner(1992)は、看護師の臨床技能の習得段階において、卒後1～2年目の看護師を新人レベルとして第2段階に位置付けており、学生時代に学習した理論的知識と臨床で獲得した実践的知識を用いながら経験を積み重ねる時期にあり、状況の局面の捉え方や優先順位の設定に教育的支援を必要とするとして述べている。滝口ら(2013)も調査研究を基に、卒後2年目看護師の継続教育の特徴について、①複雑な看護ケアに対するストレスの緩和と②経験からの学びを実践知として発展させていける教育支援の必要性にあると指摘している。このような背景には、新人研修後の卒後2年目看護師への教育が各医療施設に任されているものの不十分な状況があるためと考える。

そこで、本研究では、卒後2年目看護師が経験からの学びを理論知と関連づけ、実践知へと整理・発展していく思考方法であるリフレクション(reflection)に着目した。看護におけるリフレクションについて、田村ら(2007, 2008)は、「実践からの学びを可能にし、看護の実践的思考能力の向上を図るツールとしての可能性を期待できる」と述べている。また、Schon(1983)は、専門

職の教育は「技術的熟達者」から「反省的实践家」への転換が必要と述べ、人を対象とした専門職の成長には、リフレクションによる状況との対話が重要で、リフレクティブな実践家への転換の必要性を提唱している。以上のことから、リフレクションは卒後2年目看護師が専門職者として成長する上で基盤となる実践的思考を培う方法と言える。リフレクションの教育・実践は日本の看護界では2000年以降に報告されるようになり、看護学生(中田ら, 2005)、看護教員(池谷ら, 2005)、新人看護師(渋谷ら, 2004; 中村ら, 2014)、中堅看護師(武口, 2011)、看護管理者(徳田ら, 2012)等の報告がある。しかし、卒後2年目看護師については谷脇ら(2004)による「卒後2～3年目の臨床能力の発展における経験の振り返り」のみであり、卒後2年目看護師のリフレクションによる成長過程に焦点を当てた研究は皆無であった。また、海外のリフレクション研究でも同様に確認されなかった。

本研究では、卒後2年目看護師にリフレクションの導入・実践を試みることにより、キャリア開発にどのような意味を持つかを明らかにし、継続教育方法としてのリフレクションの意義と効果を検討することを目的とした。

II. 方法

1. 研究デザイン

卒後2年目看護師を対象に、キャリア開発におけるリフレクションの意味と継続教育方法として

の効果を明らかにするために、リフレクションをツールに実施し内容分析の手法を用いてデータ分析する質的帰納的研究デザインである。

2. 用語の定義

1) 卒後2年目看護師：看護基礎教育卒業後、看護師として就業し2年目を迎えた看護師（以後2年目看護師とする）。

2) リフレクション：経験により引き起こされた気にかかる問題に対する内的な吟味および探求であり、自己に対する意味づけを行ったり、意味を明らかにするものである。結果として概念的な見方に対する変化をもたらすことである。リフレクションには、行為の中のリフレクション（Reflection-in-action）と行為についてのリフレクション（Reflection-on-action）がある（Burns et.al, 2000）。リフレクションの基本的構成要素は、Gibbsのリフレクティブサイクル「記述・描写」、「感覚」、「推論」、「分析」、「評価・判断」、「アクション・プラン」の6つからなり（田村ら, 2008）、リフレクティブジャーナルは看護実践場面（経験）を振り返り吟味する過程をリフレクションの基本的構成要素に沿って記録する様式のことである。

3. 研究参加者と研究期間

A病院に勤務する、2013年4月に2年目を迎えた看護師で研究参加の承諾を得た、一般病棟に勤務する10名。データ収集期間は、2013年6月～2014年3月であった。

4. リフレクションの実施方法

2年目看護師へA病院の継続教育の一環として、教育専従看護師である研究者が、経験から学ぶ思考方法を理解することを目的として、リフレクションの概念定義とGibbsのフレームワーク及び、リフレクティブジャーナルの記述方法について講義を行った。その後本研究の目的・方法を説明し承諾を得られた10名に7月、10月、1月の3回、気にかかった看護場面をリフレクティブジャーナルに記述し提出してもらった。それを基にしたフィードバック面接を、第1回目：7月～

8月、第2回目：10月～11月、第3回目：1月～2月で実施した。面接は、リフレクティブジャーナル提出後10～40日以内に勤務日業務終了後に実施し、1時間以内を目途に終了した。フィードバック面接は感情を大切にし、ポジティブストロークを用い知識や技術の確認と気づきを促す問いを中心に行った。本研究のリフレクションは行為についてのリフレクション（Reflection-on-action）である。

5. 3回のリフレクション終了後のデータ収集

3回のリフレクション、フィードバック面接終了後、2月～3月に同意を得られた参加者8名にリフレクションの意味を問う半構造化インタビューを行った。インタビューは個人のプライバシーを確保できる個室を使用し、また勤務に支障がなく希望する日程で行った。①リフレクティブジャーナルを記載した意味②リフレクティブジャーナルを基に研究者と対話したフィードバック面接の意味についての質問を行い、参加者の了解を得て録音した。

6. データの分析方法

本研究は2年目看護師がリフレクションを行うことでどのような意味があるのかの語りをデータとし、リフレクションが2年目看護師の専門職としてのキャリア開発に与える意味を探求する研究であるため、テーマに沿った内容分析が必要と考え、クラウス・クリッペンドルフの内容分析の技法（Krippendorff, 1989）を採用した。

①半構造化インタビューを録音したデータを逐語録に置き換え、②リフレクションを行うことでの変化や成長に関連するデータに着目し、データを1文ごとに対象者の語りを可能な限り尊重し抽出した。③抽出した文章を相互の類似性と相違性に従って分類し、④一つの意味を持つまとまりごとに取り出しコード化した。⑤コード化した文章を、意味内容の同質性を検討しながら共通するものをサブカテゴリーとし、サブカテゴリーを同様に作業しカテゴリー名を付けた。カテゴリー名はデータの表す概念を定義するものは何かについて

内容が研究者間で一致するまで検討を重ねた。⑥カテゴリーに含まれるコード数を基に重みづけをした。⑦その後カテゴリーに含まれたコード内容が示す意味を検討し概念定義を作成し、⑧カテゴリー間、サブカテゴリー間の相互の関係を検討、関連を図式化した。⑨図式化したカテゴリー間の概要を文章化した。

7. 信頼性・妥当性の確保

データ分析の全過程で指導者のスーパーバイズを受け、データ解釈・分析の信頼性・妥当性を確保した。また参加者による逐語録の確認でデータの真实性を、構造図のメンバー・チェックングで分析の厳密性の確保を行った。

8. 倫理的配慮

平成25年4月9日付で研究者が所属する宮崎大学医学部の医の倫理審査委員会の承認を得た（承認番号2013-004）後、参加者が勤務するA病院の看護部長へ、研究の目的・方法について、文書と口頭で説明し、承諾を得た。参加者へは、研究目的、研究への参加の自由と拒否による不利益は無い事、個人情報保護について文書と口頭で説明し、同意を得た。リフレクティブジャーナルの使用については作成者の津田紀子氏の許諾を得た。

III. 結果

1. 参加者の背景

対象の2年目看護師は14名で、本研究の目的・方法について説明し、研究への参加希望者は10名あった。3回のリフレクションとインタビューまで研究に参加できたのは8名、全員女性で、年齢は、平均24.3 ± 3.7歳、基礎教育の背景は3年課程の専門学校卒業が7名、5年一貫教育卒業が1名であった。勤務病棟はICU、急性期病棟、回復期リハビリテーション病棟であった。2月～3月に半構造化インタビューを実施し、インタビュー時間は、平均22分（最短20分33秒、最長23分45秒）であった。

2. 3回のリフレクション終了後のインタビューデータの分析結果（表1）

2年目看護師の成長にリフレクションがどのような効果とその意味を与えるかについて分析した結果、表1に示すようにコード総数は137であり、25のサブカテゴリーと10のカテゴリーが抽出された。カテゴリーとサブカテゴリーはコードの数により重みづけした順に記載している。カテゴリーの概念を基に其々の相互関係を吟味し2年目看護師の行ったリフレクションの意味について構造化した。

以下、文中のカテゴリーを【】、サブカテゴリーを《》で示し、カテゴリーを示す概念を『』で示した。また、2年目看護師の語りをコード化したものは「」で示し、コード内の（）は補足説明を、カテゴリーを能力で分類したものを〔〕で示した。

1) 各カテゴリーの概念

(1) 【自己理解とセルフエンパワメントの高まり】

『2年目看護師が、自己の弱みと限界性に気づくことで、自己の特性や強みにも気づき自己自信を形成し、自己コントロールしながら自発的な看護行動へと転換する課題認識の生成基盤の高まり』のことである。このカテゴリーは、『自己の能力の限界の気づき』《自己の傾向・行動への気づき》《自己の看護実践の課題認識》《自己特性を理解した行動変容》《自己自信の生成》の5つのサブカテゴリーから構成され31コードが含まれた。2年目看護師は「自分の癖や傾向がわかった」「自分の悪いところや欠点に気づいた」と《自己の傾向・行動への気づき》があった。《自己の能力の限界の気づき》では「自分には足りないところがある」「一人で思いつくことは小さいことで、アドバイスで広がった」と、自分の能力の限界に気づいていた。しかし、「自分の判断や対応で良かったんだと思えた」と自分の良さや強みに気づく、《自己自信の生成》もみられた。《自己特性を理解した行動変容》では「欠点が悪化しないようにと、補う行動ができるようになった」「自分の傾向に気づいて、ひと呼吸おいて考えて行動するようになった」とセルフエンパワメントが高まり、自己コントロールした行動ができるようになってい

表1 2年目看護師のリフレクションの意味に関する内容分析結果

カテゴリー総数：137（ ）内はカテゴリーのコード数

カテゴリー	サブカテゴリー	コード数
自己理解とセルフエンパワメントの高まり (31)	・自己の能力の限界の気づき	10
	・自己の傾向・行動への気づき	8
	・自己の看護実践の課題認識	6
	・自己特性を理解した行動変容	4
	・自己自信の生成	3
熟慮した看護実践の展開力の高まり (27)	・経験の学びを想起した個別的看護実践能力の向上	11
	・看護実践の多面的な視点・視野・思考の拡張	8
	・経験の学びを想起した状況に応じた看護実践能力の向上	6
	・立場を変換した看護実践能力の向上	2
リフレクションの肯定的な価値認識の深まり (20)	・対話の価値に対する認識の深まり	11
	・リフレクションの肯定的な意味づけ	9
クリティカルな思考の獲得 (12)	・自己の看護実践を吟味する力の獲得	6
	・経験を探求する意味の理解	6
継続的にリフレクションする力の獲得 (10)	・日々の実践において主体的にリフレクションする力の向上	6
	・経験の想起とリフレクティブに思考する力の獲得	4
他者の力を活用した看護実践能力の獲得 (9)	・対応困難な時は他者に相談する行動の定着	5
	・他者の力を活用した看護実践の拡大	4
リフレクションに必要なスキルの向上 (9)	・効果的なリフレクション場面の選択	5
	・自己の感情や思考を表現する力の獲得	4
安全と倫理観を融合した看護行動の認識の高まり (7)	・倫理観の回帰と共有する意義の理解と意欲	4
	・安全優先を認識した看護行動の獲得	3
チーム医療マネジメントの理解の深まり (6)	・多職種での情報共有と患者ケアへの情報の還元	4
	・チームの中で情報共有する力の獲得	2
状況に応じたコミュニケーション力の向 (6)	・状況に合わせたコミュニケーション技法と能力の獲得	3
	・熟慮したコミュニケーション力の獲得	3

た。3回目のリフレクションを行う頃には、「自己の看護実践の課題認識」が芽生え、「3年目には考える力をつけていきたいと思った」と課題認識を生成する基盤を形成していた。

(2)【熟慮した看護実践の展開力の高まり】

『経験からの学びの想起により、多面的な視点と広い視野から個別的な看護を思考し、自己を患者の立場に変換する態度を育み、患者の視点に立った看護実践の展開力が高まること』である。このカテゴリーは、「経験の学びを想起した個別的看護実践能力の向上」「看護実践の多面的な視点・視野・思考の拡張」「経験の学びを想起した状況に応じた看護実践能力の向上」「立場を変換した看護実践能力の向上」の4つのサブカテゴリーから構成され、27コード含まれた。2年目看護師

は、「患者さんによって違うけどあの時こうだった、今回はこうしてみようと考えができるようになった」と「経験の学びを想起した状況に応じた看護実践能力の向上」となっていた。また、「必要な情報で分かっていることでも、違う視点で焦点を当てることも必要と分かった」と「看護実践の多面的な視点・視野・思考の拡張」がみられ、「対応困難な患者へはアドバイスを思い出して実践できた」と「経験の学びを想起した個別的看護実践能力の向上」へと繋がっていた。そして、「患者さんの立場に立ってちゃんと話を聞くようにしている」と「立場を変換した看護実践能力の向上」の力が育まれ、患者の視点に立った看護実践行動となっていた。

(3) 【リフレクションの肯定的な価値認識の深まり】

『リフレクティブな経験の記述と対話面接の経験により、リフレクションの効果の体感により看護実践におけるリフレクションの意味と価値認識が深まること』である。このカテゴリーは《対話の価値に対する認識の深まり》《リフレクションの肯定的な意味づけ》の2つのサブカテゴリーから構成され20のコードが含まれた。2年目看護師は「日々の実践で書かずに頭の中で整理して行えるともっと成長できると思う」「リフレクティブに振り返る機会がなかったらその場面を振り返る事もなく、毎日を過ごしていたと思う」と《リフレクションの肯定的な意味づけ》をしていた。また、リフレクションの対話に対して「内容が深くなると思った」「考え方を広げてもらえて、そうだなと思う事が多くあった」と《対話の価値に対する認識の深まり》を感じ、対話を含めた方法を肯定的に価値づけていた。

(4) 【クリティカルな思考の獲得】

『自己の看護経験を客観的に探究し、看護実践の効果を適切に評価するとともに自己の内面の変化と成長にも目を向け、自己と他者の相互作用の関係性の中で看護実践の意味を吟味する思考過程の獲得』のことである。このカテゴリーは、2つのサブカテゴリー《自己の看護実践を吟味する力の獲得》《経験を探求する意味の理解》から構成され、12コードが含まれた。2年目看護師は「何が抜けていたか、まずかったか見えてきた」「振り返る事は、具体的にここが良くなったと自分の成長が分かると思う」と語っていた。自己の看護実践を客観的に吟味し、不足している点や改善している点に気づく《自己の看護実践を吟味する力の獲得》となっていた。また、「一つ一つの文章を深く振り返ることは、そうだったのかと気付く振り返りになった」と《経験を探求する意味の理解》となり経験をクリティカルな思考で探求する力を獲得していた。

(5) 【継続的にリフレクションする力の獲得】

『経験を想起し、リフレクティブに思考する意味を理解することで、日々の経験を主体的にリフレクションする力の獲得』のことである。このカ

テゴリーは、2つのサブカテゴリー《経験の想起とリフレクティブに思考する力の獲得》《日々の実践において主体的にリフレクションする力の向上》から構成され、10のコードが含まれた。2年目看護師は「1回目書いた時からすると自分で考えるということができるようになった」「今は（経験を思い出して）自分で考えて動けるようになった」と《経験の想起とリフレクティブに思考する力の獲得》となっていた。また、《日々の実践において主体的にリフレクションする力の向上》では、「違う場面でも振り返ることができるようになった」「振り返る事が多くなった」と主体的にリフレクションする行動へ変化していた。

(6) 【他者の力を活用した看護実践能力の獲得】

『自分では対処できない状況や看護援助について、他者の力を活用する必要性を自ら判断し、問題解決を図り、状況に合った看護を提供する力の獲得』のことである。このカテゴリーは2つのサブカテゴリー《対処困難な時は他者に相談する行動の定着》《他者の力を活用した看護実践の拡大》で構成され、9コードが含まれた。2年目看護師は「自分で考えて分からない時は先輩に聞いて動くようになった」「(自分の傾向に気付いたことで)先輩に相談をするようになった」と《対処困難な時は他者に相談する行動の定着》となっていた。また、「先輩に聞けるようになり自分の知識以上のプラスの意見がもらえて患者に広く関われるようになった」と《他者の力を活用した看護実践の拡大》がみられ他者の力の活用が看護の実践能力を高めると認識していた。

(7) 【リフレクションに必要なスキルの向上】

『自己成長につながる効果的で意味のあるリフレクションの場面を選択し、場面の状況や事実を具体的に想起し、自己の感情をも含めて客観的に記述・表現（描写）するスキルの獲得』のことである。このカテゴリーは、2つのサブカテゴリー《効果的なリフレクション場面の選択》《自己の感情や思考を表現する力の獲得》で構成され9コードが含まれた。2年目看護師は自己の経験を想起する上で、どの場面を選択するか思考し「記憶に残っている事例を書いた」「振り返らないと

いけないと思った事を書いた」と述べ、リフレクションの前提となる《効果的なリフレクション場面の選択》を行っていた。また《自己の感情や思考を表出する力の獲得》では、「オドオドしたりとか、自信がない事の場面が多かった」「良いことも悪い事もあって紙面上にすることは苦しい事もあったがやって良かった」と自己の感情や考え方が表出されることを理解し、記述することの苦悩を受け止め、自己感情を客観的に表出する記述・描写のスキルの向上がみられた。

(8) 【安全性と倫理観を融合した看護行動の認識の高まり】

『安全性と倫理観が一体となって展開される臨床看護体験を通して、患者の安全を優先し、高い倫理観を保持しながら看護行動を行う認識が高まること』である。このカテゴリーは、2つのサブカテゴリー《安全優先を認識した看護行動の獲得》《倫理観の回帰と共有する意義の理解と意欲》で構成されコード数は7コードであった。2年目看護師は、「同じ失敗をしないようにリフレクションでアドバイスをもらったことを思い出している」「失敗しそうな時は直ぐ（先輩に）聞くようにはなった」と、自分の能力を判断し安全な看護を提供するため先輩に聞くという《安全優先を認識した看護行動の獲得》をしていた。また《倫理観の回帰と共有する意義の理解と意欲》では、(対話することで)「初心に戻る機会になった」「自分が思っている倫理的な問題をカンファレンスで出していきたいと思えた」と倫理観を持つことの重要性に気づいていた。

(9) 【チーム医療マネジメントの理解の深まり】

『チーム医療のキーパーソンとして、多職種間のコミュニケーションを推進し、患者のケアや治療、回復過程及び社会復帰に貢献するという看護職の役割の認識と理解が深まること』である。このカテゴリーは2つのサブカテゴリー《チームの中で情報共有する力の獲得》《多職種での情報共有と患者ケアへの情報の還元》で構成され6つのコードが含まれた。2年目看護師は、「チーム医療が大事ということが分かった」「3回目にはセラピストやソーシャルワーカーと情報共有する機

会が増えた」と、チームで関わり、他職種と情報共有する行動が見られ《チームの中で情報共有する力の獲得》となっていた。更に《多職種での情報共有と患者ケアへの情報の還元》では、「受け持ち患者のことを積極的に医師に相談できるようになった」「リハビリテーションスタッフからの情報を活用し個別的な退院指導に繋げられた」と積極的な情報共有と、チーム医療の中での看護師としての役割認識の深まりが見られた。

(10) 【状況に応じたコミュニケーション力の向上】

『患者の病状・回復過程の状況に応じたコミュニケーション技能と手段・技法を吟味し、熟慮したコミュニケーションを積極的に行う力の向上』のことである。このカテゴリーは2つのサブカテゴリー《状況に合わせたコミュニケーション技法と能力の獲得》《熟慮したコミュニケーション力の獲得》で構成され6つのコードが含まれた。2年目看護師は、3回のリフレクションの対話から「状況に合わせた今後の事を考えたコミュニケーションができるようになった」「(業務の状況を考えて)患者さんとコミュニケーションを取ることができている」「耳を傾け、深くコミュニケーションをとれることを課題としたい」と患者の状況・回復過程や、業務状況を調整しながら傾聴し、深いコミュニケーションを行う意欲を示し《状況に合わせたコミュニケーション技法と能力の獲得》となっていた。《熟慮したコミュニケーション力の獲得》では、「検温だけでなく、些細な事でも話そうと考えるようになった」と積極的に対話の意味を考え取り組む姿勢となっていた。

2) 2年目看護師におけるリフレクションの意味の構造について(図1)

図1に2年目看護師がリフレクションを行った意味の構造を示した。各カテゴリーの図の大きさはコード数を表し、カテゴリー間の矢印の大きさの違いはコード数による意味づけと内容による関連の深さを、カテゴリー内の線はサブカテゴリー間の関連を示している。各カテゴリーは定義づけた内容により、看護の実践的能力に関わる『看護実践に必要な能力』と実践からの学びを得る思考過程を促進する『リフレクションを行うための能

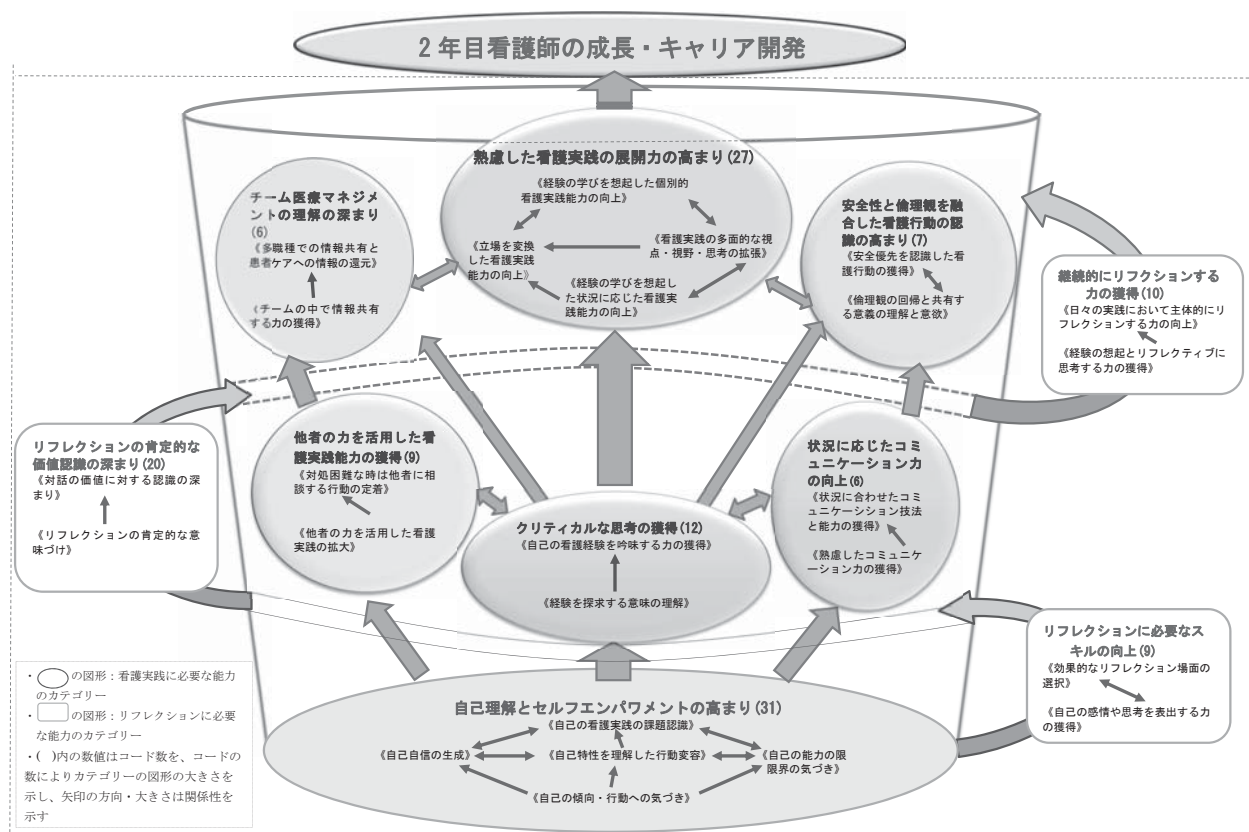


図1 2年目看護師のリフレクションがキャリア開発に与える意味の構造

力』の2つに分類された。『看護実践に必要な能力』は、最も高い重みづけ(31コード)にある【自己理解とセルフエンパワメントの高まり】を基軸として、【クリティカルな思考の獲得】から、【他者の力を活用した看護実践能力の獲得】と【状況に応じたコミュニケーション力の向上】により、【安全性と倫理観を融合した看護行動の認識の高まり】と【チーム医療マネジメントの理解の深まり】となった。これらの6つのカテゴリーは相互に関連しながら【熟慮した看護実践の展開力の高まり】へと発展していた。また『リフレクションを行うための能力』は【リフレクションに必要なスキルの向上】【リフレクションの肯定的な価値認識の深まり】【継続的にリフレクションする力の獲得】で構成されていた。リフレクションの意味の構造は、【自己理解とセルフエンパワメントの高まり】を中核に『リフレクションを行うための能力』が『看護実践に必要な能力』を螺旋状に取り巻き、思考過程を深め、専門職者への成長に繋がる全体構造を成していた。本構造は研究参加

者によるメンバー・チェックで納得が得られ厳密性が確保された。また、3回のリフレクティブジャーナルの記述と面接には「1回のリフレクションでは、記述の方法やリフレクションの意味・意義は理解できなかったと思う。3回行うことで理解できた」と述べ効果的方法と受け止めていた。

IV. 考察

1. 2年目看護師が行ったリフレクションがキャリア開発に与える意味

リフレクションがキャリア開発に与える意味の分析により、10のカテゴリーが抽出され、構造化の過程でその性質から『看護の実践に必要な能力』と『リフレクションを行うための能力』の2つに分類された。『看護の実践に必要な能力』は7つのカテゴリーで構成され、もっともコード数が多いリフレクションの構造の基軸とした【自己理解とセルフエンパワメントの高まり】は、自己を客観視した自己への気づきに基づいていた。田村ら

(2008)は、「自己への気づき」は自分自身の物事の捉え方、考え方、感じ方の特性が看護行為の選択にどう影響したかを知ることになると述べており、経験を意味づけするリフレクションの土台であり中核になると考える。2年目看護師はリフレクションにより、自己理解することで【クリティカルな思考の獲得】となり、自己の知識や能力を認識した【他者の力を活用した看護実践能力の獲得】と【状況に応じたコミュニケーション力の向上】に繋がった。更に【チーム医療マネジメントの理解の深まり】と【安全性と倫理観を融合した看護行動の認識の高まり】となり、経験からの学びを活用する【熟慮した看護実践の展開力の高まり】へと看護実践能力を高めるに至ったと考える。【チーム医療マネジメントの理解の深まり】と【安全性と倫理観を融合した看護行動の認識の高まり】のカテゴリーは、中村ら(2014)の新人看護師のリフレクションには見られず、2年目看護師の特徴と考えられた。これは2年目看護師が、医療チームの一員として受け持ち患者の看護展開での役割実践を通して認識を高めたことで、経験を倫理観や役割・立場を意識した視点でリフレクションした結果と考える。また池西(2014)は、キャリア発達段階での気付きな実践のリフレクションは、自己のキャリア課題と質の高い看護実践の吟味となり、専門職としての有り様や自分の強みを活かすキャリアマネジメントとなると述べている。従って2年目看護師がリフレクションを行った重要な意味は、キャリア発達課題としてのチームの中の看護の役割認識にあり、キャリアマネジメント能力を育てていたと考える。また『リフレクションを行うための能力』に分類されたカテゴリーは【自己理解とセルフエンパワメントの高まり】を基に【リフレクションに必要なスキルの向上】となり、経験から学ぶ事を認識し【リフレクションの肯定的な価値認識の深まり】に発展していた。リフレクションにより経験を意味づけ学ぶことに価値があると理解できたことによって【継続的にリフレクションする力の獲得】に至り、経験を吟味し学ぶ思考過程を培うリフレクションの本質を理解し、【熟慮した看護実践の展開力の

高まり】へと成長を促進する側面からの力となったと考える。

2. 2年目看護師の継続教育方法としてのリフレクションの意義と効果

本研究では、リフレクションの概要とリフレクティブジャーナルの記載方法を理解する目的で講義した。これにより動機づけられ、3回のリフレクションとフィードバック面接に継続して参加できたと考える。また、フレクティブジャーナルについて「記述方法や意味・意義の理解に繋がった」との反応がみられたことは、リフレクティブサイクルに基づいた記述を繰り返したことにより、内容不足への気づきや経験を意味づける思考プロセスの具体的理解を深めたと考えられる。

次に、リフレクティブジャーナルを用いた対話面接の継続教育方法の意義を考えてみる。リフレクションにおける「対話」には「自己との対話」と「他者との対話」がある。フィードバック面接は、2年目看護師自身の「内的対話」、すなわち「自己との対話」であり、自分が自分に問いかけていくことである。池西ら(2009)は、「自己との対話」について自己内他者と自己とが向き合うことであり困難を伴うと述べている。故に「自己との対話」を可能にするには、面接者の姿勢・態度、及び問いの質が問われるため、対話のスキルを高めることが重要である。面接者が支援的な姿勢・態度と吟味した問いかけで感情を汲み取り、2年目看護師の「自己との対話」を促進させることが、専門職者としての成長に繋がると考える。そして2年目看護師が自律的に経験を通じた自己との対峙ができるならば、リフレクションを習慣化し、キャリア開発に繋げていけると考える。

3. 研究の限界と課題

本研究の対象者は一施設に限定されており、すべての2年目看護師に一般化は困難であるため、対象施設と対象者数を増やす必要がある。また、リフレクションの実施者とその意味・効果の観察者を分担し、データの精度を高めてゆくことが必要である。

V. 結語

2年目看護師の行うリフレクションがキャリア開発に与える意味の要素は10で構成され、『看護実践に必要な能力』である【自己理解と自己をエンパワメントする力の高まり】を中核として【クリティカルな思考の獲得】により、【他者の力を活用した看護実践能力の獲得】、【状況に応じたコミュニケーション力の向上】から【安全性と倫理観を融合した看護行動の認識の高まり】と【チーム医療マネジメントの理解の深まり】となり【熟慮した看護実践の展開力の高まり】へ至る構造を示した。更に【リフレクションに必要なスキルの向上】【リフレクションの肯定的な価値認識の深まり】【継続的にリフレクションする力の獲得】により、『リフレクションを行うための能力』の理解に至っていた。また、【自己理解と自己をエンパワメントする力の高まり】を中核とした『看護実践に必要な能力』と『リフレクションを行うための能力』が継続的に相互作用することが、看護実践能力は高まり専門職としての成長とキャリア開発に繋がると理解できた。また継続教育方法としては、事前講義とリフレクティブジャーナルの記述、及び自己との対峙を促すフィードバック面接を組み合わせた3回のリフレクションの有効性が示唆された。

本研究にご協力頂いた参加者に感謝します。本研究は宮崎大学大学院看護学研究科修士論文の一部を加筆修正したものであり、日本看護科学学会第35回学術集会で報告した。

文献

- Schon, D.A. (1983)/佐藤学, 秋田喜代美訳 (2007): 専門家の知恵 反省的実践家は行為しながら考える, 2-11, ゆみる出版, 東京
- 池谷千佳 (2005): 教師のリフレクションによる授業の改善, 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録, 30, 45-52
- 池西悦子, 田村由美 (2009): リフレクション, グレック美鈴, 池西悦子 (編), 看護教育学-看護を学ぶ自分と向き合う-, 117-128, 南江堂, 東京
- 池西悦子 (2014): リフレクションと看護教育, 田村由美, 池西悦子, 看護の教育・実践に活かすリフレクション-豊かな看護を拓く鍵-, 55-79, 南江堂, 東京
- 厚生労働省 (2009): 新人看護職員研修ガイドライン改訂版 <http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000049578.html> [2016-9-30現在]
- 武口真理花 (2011): リフレクションによる中堅看護師の自律の芽生えに関する実践的検討, 日本看護管理学会誌, 15(2)147-157
- Krippendorff, K. (1989)/三上俊治, 椎野信夫, 橋本義明 (2005): メッセージ分析の技法, 勁草書房, 東京
- Benner, P. (1992)/井部俊子 (2005): ベナー看護論 新訳版-初心者から達人へ-, 医学書院, 東京, 11-32
- 中田康夫, 田村由美, 澁谷幸 (2005): 基礎看護実習におけるリフレクティブジャーナル上での教師と学生の対話の意義, 神戸大学医学部保健学科紀要, 20, 77-83
- 中村美保子, 東サトエ, 津田紀子 (2014): 新人看護師のリフレクションが専門職者としての成長に与える意味についての研究, 南九州看護研究誌, 12(1), 21-32
- Burns, S., Bulman, C. (2000)/田村由美, 中田康夫, 津田紀子 (2005): 看護における反省的実践-専門的プラクティショナーの成長-, ゆみる出版, 4
- 澁谷美香, 岡本幸江 (2004): 新卒看護師の臨床実践に関するリフレクションに伴う評価の特徴, 日本看護科学学会学術集会講演集, 24, 143
- 田村由美 (2007): 看護実践力を向上する学習ツールとしてのリフレクション, 看護教育, 48(2), 1078-1082
- 田村由美, 津田紀子 (2008): リフレクションとは何かその基本概念と看護・看護研究における意義, 看護研究, 41(3), 171-181
- 田村由美, 池西悦子 (2014): 看護の教育・実践に活かすリフレクション-豊かな看護を拓く鍵-, 14-18, 南江堂, 東京
- 徳田順子 (2012): リフレクションの取り組みに対する成果-意識と行動の変化の実態調査を行って-鳥取赤十字病院医学雑誌, 21, 6-8
- 滝口裕子, 麻植真弓, 千郷ひとみ (2013): 卒後2年目看護師の思いや支援ニーズの実態調査-係長としての教育的サポート-, Tokushima Red Cross Hospital Medical Journal, 88-91
- 谷脇文子, 近藤裕子 (2004): 卒後2~3年目の臨床能力の発展における経験の振り返り, 日本看護学会論文集, 看護管理, 34, 115-117